の碗もその一例である。

鉄製品　銹化の著しい菜切包丁がある。

ガラス製品　化粧瓶、薬瓶などがある。その一部には、明治四十二年～昭和六年にかけて製造されたことの知れるものがある。

その他、黒灰色に燻した瓦の小片や櫛などが出土している。櫛には象牙製のものとべっ甲製のものがあり、前者には二箇所に小さな菊紋が嵌め込まれている。

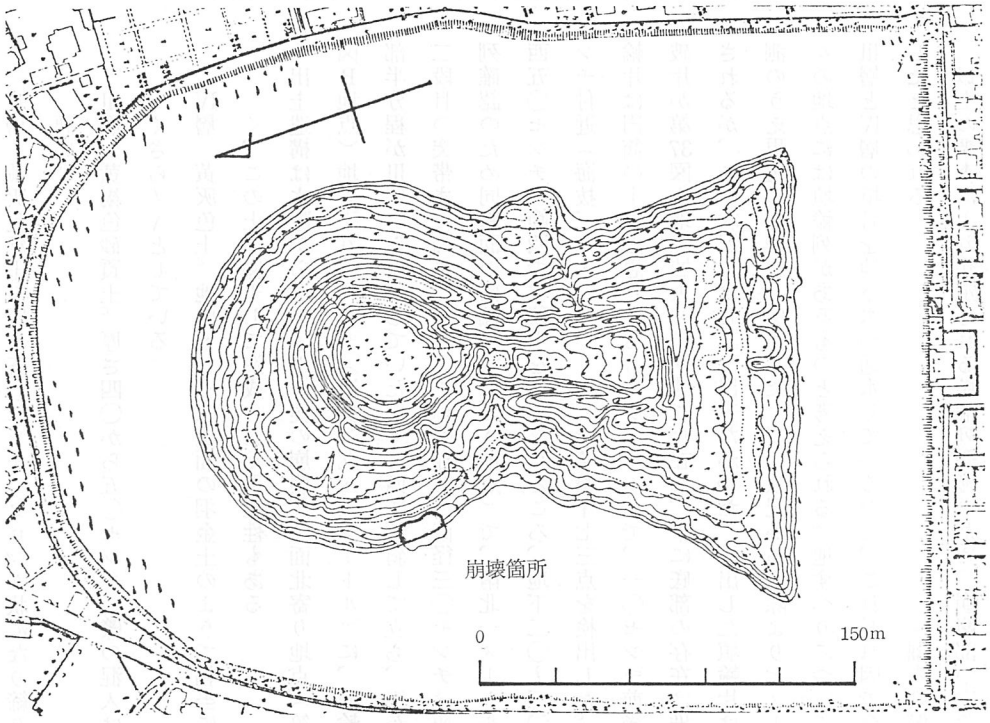
（福尾正彦）

恵我長野西陵墳丘崩壊部露出遺構の調査及び崩壊部応急保護工事箇所の調査

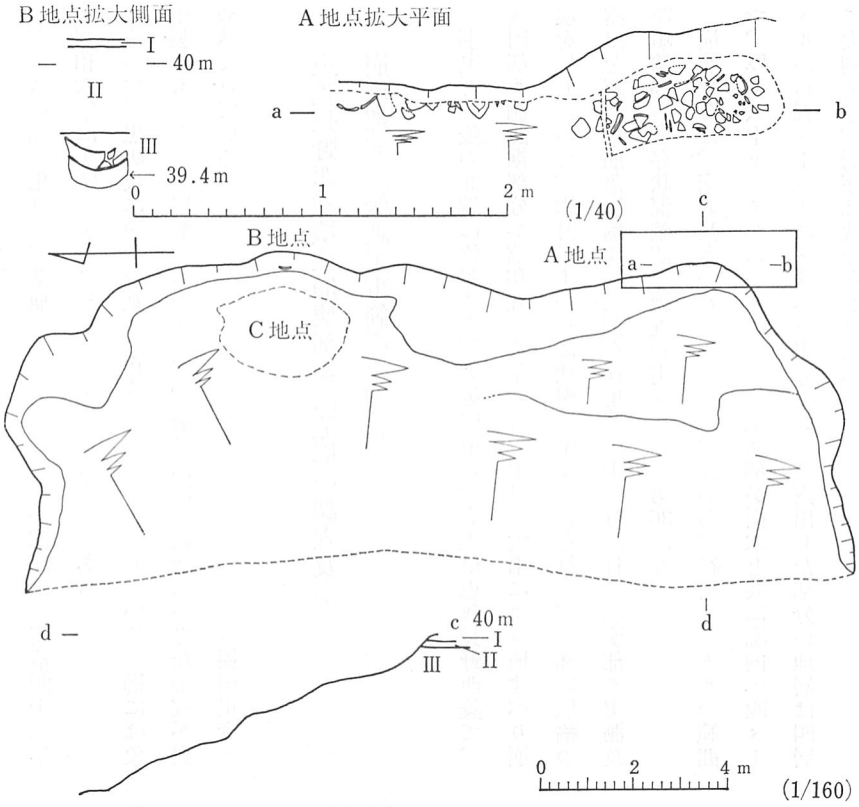
羽曳野丘陵の北端に位置する前方後円墳の仲哀天皇恵我長野西陵で、後円部西側法裾部分が昭和五十八年六月二十日の大雨により地すべり崩壊を生じたので、六月二十一日に状況の緊急調査を行い、一部に埴輪の露出を認め、崩落埴輪片一二個を採集し、十一月四日に崩壊部の実測及び埴輪列の残存状況確認の調査を実施した（第36図）。

崩壊状況は、南北長さ一八メートル、水際から奥行七メートルの範囲で、厚さ八十センチから一メートルの上層部が樹木と共に堀内へ四メートルから五メートルほどすべり出していた。露出した部分の地層は四層に大別でき、層序は次のとおりである。

Ⅰ層　表土。厚さ五センチの腐植土。



第36図　恵我長野西陵調査箇所の位置（1/3000）



第37図　恵我長野西陵調査箇所平面・断面および遺物出土状況

Ⅱ層　黄灰色粘土。厚さ五〇センチ。ブロック状になり締りは悪い。

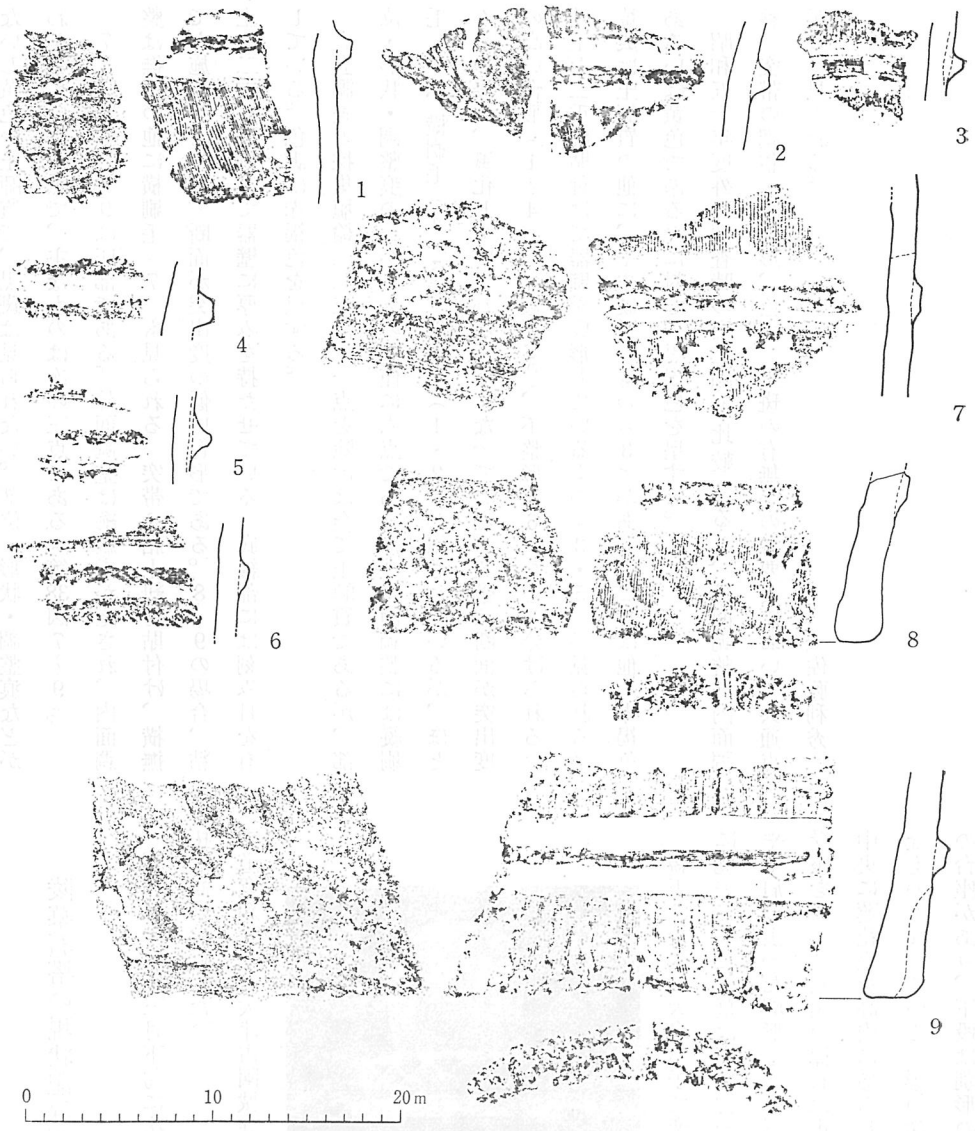
Ⅲ層　黄褐色砂質土。厚さ四〇から五〇センチ。礫の混入は少くさら〳〵としている。

Ⅳ層　黄灰色土。地山もしくは法面の羽金土のようで相当に固く、この上に盛土して造成された可能性もある。

出土遺構は水際から七メートル奥の崩壊部断面北寄り地点（第37図B地点）地表下八〇センチ（海抜三九・四メートル）に、埴輪底部半分程がⅢ層から露出していた。やゝ西に傾斜して立ち、下から二段目の突帯まで高さ二〇センチが残存し、直径三〇センチ。埴輪列確認のため同断面の南端（第37図A地点）で、南北一メートル東西五〇センチの範囲で堆積土を除去したところ、地下二〇～三〇センチ付近（海抜三九・五メートル）で埴輪片七三点を検出した。埴輪片は円筒の上部と思われるものがほとんどで、一〇センチ前後の破片が第37図A地点拡大図の状態で存在し、下に底部の存在は推測されるが、この状況では確認は出来なかった。検出した埴輪片は実測のうえ現況の儘埋戻し保存した。この状況から水際より七メートルの地点には埴輪列があるものと考えられる。地すべりについてはⅢ層とⅣ層の境目を地下水が通水しているので、これが原因で発生したと思われる。

（堀内朝保）

以上の調査により想定される埴輪列保護のため、崩壊部の応急保



第38図　恵我長野西陵の出土品（1/4）

護工事を行うことになり、昭和五十九年一月二十四・三十日、二月七日に立会調査を実施した。

工事は崩壊線に沿って土留木柵を設けるもので、五〇センチ間隔で杭打し、トリカルネット及びサンドマットをこれに取付けるための溝を延長四二メートル、幅二〇センチ、深さ約三〇センチ手掘りで行った。掘削箇所の土層は前記調査のⅡ層～Ⅲ層で、Ⅱ層中より埴輪片一二点を採集した。埋戻しと、崩落土による木柵の裏込めは、遺物の有無を観察しながら順次手作業で行った。残土の整地作業中、埴輪底部露出のB地点から約一メートル堀側へ下った所（第37図C地点）で、崩落土砂の中から埴輪片一〇点を採集した。

（木林成嘉）

緊急調査で採集された埴輪片一二点は、全て円筒と考えられ、赤褐色

ないし黄色の土師質で、黒斑は見られない。部位・形状・調整痕などがわかるものは六点で、主なものは次の三点である（第38図7～9）。

7は胴部、8・9は底部である。外面調整は縦刷毛が施され、内面調整は撫での他に横刷毛（7）も見られる。突帯は粘土紐を貼付け、横撫でを施したもので、断面が突出度の低い台形である。8・9の場合、粘土を二重に貼付けて器壁に厚みを持たせている。底縁部には刻み目を有している。色調は赤褐色を呈する。

立会調査の採集埴輪二二点は、一点を除けば全て土師質であるが、部位・形状・調整痕のわかるものは僅に六点であった。外面調整には縦刷毛（3）、横刷毛（4・5）、斜刷毛（1・2）が施されているが、ほとんどの場合、風化していてわからなくなっている。突帯は断面が突出度の高い台形（1～4）、三角形（5）、不整形（6）などに分けられる。粘土を二重に貼付けて器壁を成形しているもの（3・5）が見られる。焼成は土師質の他に、やや硬質のもの（3）があり、これは他が赤褐色あるいは黄色であるのに対し、黒褐色を呈する。

昭和五十年度外堤調査時の出土品と比較すると、外面調整、内面調整、突帯の調整・断面形、色調、黒斑の有無等の各要素において共通点が多く見られる。

（佐藤利秀）

陵墓石塔の現状記録調査

昭和五十八年三月下旬に次の三基の石塔に就て、写真撮影・銘文の採拓・観察を行った。

(1)道寛親王墓（大津市園城寺町　三井寺中院聖護院宮墓地・第39図）

第39図　道寛親王墓

親王は後水尾天皇皇子で聖護院門跡。延宝四年（一六七六）三月八日に薨去された。墓は高さ約一五〇センチの花崗岩製の無縫塔で、塔身はやや肩の張った卵形で素弁三段葺の蓮座があり、その下には八角三段の受座を作る。八角の棹石は正面は縁どりをして銘を彫り、他の七面には中央に蓮花座を高肉にあらわしている。しかし本来の形状を失い象徴的なものとなっている。彫の深い複弁の反花が棹石をうけ、その下に二段の台座があり、下段は刳形のある八脚を作り出して八角の基礎石に据え